「ありがとう」を十万回唱えたらガンが消えました！

遺伝子スイッチ・オンの奇跡

工藤房美講演会

2016年7月21日

広島市まちづくり市民交流プラザ

記録：酒井伸雄　http://yogananda.cc

工藤さんのお話しされた内容を読みやすくするため、
文意を変えない範囲で一部文章表現を変えています。

今ご紹介していただきました、私が工藤でございます。
どうぞよろしくお願いいたします。

大変長らくお待たせいたしました。
今日は長く待っていただいた皆さんに、お詫びの印で、いつもしないような話も二つぐらいしようと思います。

私はガンで余命一ヶ月の宣告をされて、その後ガンが消えて元気になりました。
それからちょうど十年になります。
そして村上和雄先生から講演をしなさい、本を書きなさい等いろんなことを言っていただき、少しずつそれに応え、頑張って生かさせていただいているところです。

こうやって講演をする前に、必ずみなさんにひとつだけお願いをさせてもらっています。
それはどういうことかと言いますと、演題にもありますように、また本のタイトルにもありますように、遺伝子のスイッチをオンにして、ありがとうを十万回唱えたらガンが消えました。
ハッキリと書いています。
みなさんこの言葉を聞いて、病院に行かなくてもいいとか、現在の医療を否定している人の話ではないかと思われがちなんですが、一切そういうことはありません。
はじめにお断りするのは、日本の医療、病院の先生、スタッフの皆様、そういう方たちの否定をするようなお話では一切ないということです。
どうか勘違いなさらないように。
病院の先生やスタッフの皆さんは、病気で困っている人を、本当によかれと思い、寝る時間を割いて一生懸命尽くしてくださっておられます。
たくさんの勉強をし、困っている人を助けたいという熱い思いでお仕事をなさっておられます。
一切そういう人たちを否定する話ではありません。
どうか勘違いしないようお聴きくださるとありがたいです。

なぜこのことを最初に言うかというと、私の場合、たくさんの講演会に行っても、三日ぐらい経つと内容の半分ぐらいしか覚えていなくて、一週間ぐらいするとほとんど覚えていないんですね。
皆さんもたぶん同じような経験がおありだろうと思います。
今日の私の話もきっとそうではないかと思うんですが、日本の医療を否定するお話ではなかった、ということだけはしっかりと覚えて帰っていただけると、ありがたく思います。

私は今からこの時間をいただいて、余命一ヶ月のガンがどうやって治ったのか、村上和雄先生とどうやって仲良くさせていただくようになったのか、そしてさきほど言っていただきましたようにインド・ネパール料理店をしているんですが、なんでカレー屋さんをしているんだろう、そういったところ。
それから時間がありましたら、今これから私がやりたいことをお話しして、お話が終わったら、皆さんからの質問にお答えしたいと思います。
どこの会場でもたくさん質問をされます。
疑問に思ったこと、ご病気の方などおられましたら、聞いてくださると嬉しく思います。
私は医療関係者ではありませんので、十分なお答えはできないんですが、皆様の生命（いのち）が輝くよう、今日はその思いを込めてお話をさせていただきます。

私が余命一ヶ月と宣告を受けたガンの話、子宮ガンの話なんですが、実は本当に正直申しまして、男性の前ではしたくない話です。
女性の方でしたらお産をして、気持ちが分かる～と言っていただけるんですが、今日は男性がたくさんいらっしゃるので、どうか男性の方は、自分の母親のガンが治った時の話をしているといった気持ちで聴いていただけると嬉しく思います。

私は十年前、熊本の市民病院というところでガンの宣告を受けました。
会社で倒れたんですね。
そして運ばれて診てもらうことになったんです。
最初は日赤、日本赤十字病院に行きました。
そしたらそこの先生が「なんか変ですよ。血液がどうもおかしい」と言われ、もう一回検査に来てくださいということだったので、家から近い熊本市民病院を選んで行きました。
子宮の方から出血をしていたんですね。
まずはいろんなところを診てもらう前に、まずは婦人科かなと思って、婦人科の方にかかりました。
そしたら診察台がありますよね。 分かりますよね。
ここの話をするから男の人の前で話したくないんですけど・・・。

診察台の上乗って部長先生がやって来て、出血をしている部分を診られた瞬間、私の脚、太もものところを思いっ切りバシーッと叩かれたんです。
「なんでこなんに（こんなに）なるまでほたっとった（放っておいた）んだ～！」
熊本弁で怒り狂って叫ばれました。
「君はガンだよ。 なんでこなんなるまでほたっとったんだ！ なんで病院に来なかったんだ！」

ものすごい勢いで怒鳴られて、叱られて、その上叩かれて・・・。
四十いくつで人に叩かれるなんてなかなかないと思いますけれども、私は思いっ切り叩かれて、そのことがショックでした。
実はガンと言われたことよりも、叩かれて怒られた方がショックで・・・。
なぜショックかというと、熊本市民病院は患者さんがものすごくあふれていて、婦人科は特に多いんですね。
本当に立っているところがないぐらい患者さんが多い病院で、今の部長先生の叫び声をみんな聴いたよね～って。　わ～まずいな～って。
まずはガンということよりも、そのことをまず思いました。
なんでまずいかって言ったら、私が、私以外の人間があそこにいたら、今からものすごくひどいガンの人が出てくると思ったら、チラッとでも私の姿を見ると思ったんですね。
“だから私も今から見られる”と思ってですね、いやだな～、まずいなまずいなまずいなって思って、とにかく早く帰りたい、家に帰りたい、ここをどうやって切り抜けよう、それが私のガンの宣告の、「一生忘れられない思い出」です。

それからどうなったかと言うと、部長先生がですね、
「ガンの部分を手術しましょう。　早く手術しないと君は生命がないから。
　こんなにひどくなってるなんて・・・」
とおっしゃって検査をしました。　二週間後に手術の日も決めました。
そしたらお陰様で転移がなかったんですね。
ですからガンの部分だけを取り除こうという話になって、私は医療の知識はありませんから、そこの部分だけを取っていただいたら元気になるんじゃないかなと本気で思っていました。

次の日が手術の日、前の日に入院をして、手術のためのいろんな準備をされますよね、私はそれを全部クリアーして、“早く明日にならないかな”と本気で思って待っておりました。
そしたらですね、当時４０歳のヒゲを生やした私の主治医が入ってきました。
後で入院患者の仲間みんなで付けたあだ名が鉄仮面だったんですけど、その主治医はひとつも笑わない、すごく冷たい顔の先生だったんですね。
で、その先生が入ってきて、「残念です～」、「残念です～」とおっしゃるんです。
何が残念なんだろう、この人は何を言っているんだろうと思って聞いてたら、
「いやいや～、もうガンが広がりすぎていて、僕の腕がふるえない」て言われたんですよ。
結局「手術ができない。 残念です」と言われるんです。
「それは私が残念な話じゃないんですか」ってちょっと突っ込んだんですけど、先生は、
「いや、僕が残念なんです」っておっしゃって、
「助けたいのに助けられない。　残念だ・・・」
いや、どう考えても私が残念な話なのにと思ってですね。
で、私は一体どうなるんだろうと思って、先生にお尋ねしました。
「手術しないんだったらどうなりますか」って聞いたら、細胞診という細胞を取って調べた時に血管を傷つけたようで、そこからすごく出血しているので、その出血している部分を放射線で焼きましょうという説明がありました。

当時ですね、ちょうど十年前。
その血管を放射線で焼くとおっしゃったんですが、三十回、毎日、前からと後ろから、子宮があるところに。
「まあ痛くもかゆくもありません。 一日一分ぐらいの治療ですから」とそうおっしゃいました。
で、私はそうなんか～と思って、早く三十回終わればいいな～と思って聞いてたら、先生がですね、
「その後三回、ラルスっていう痛くて辛い、ものすごく・・・、僕男だから分からないけど、大変な治療をします」っておっしゃられたんです。
へ～そうなんだ～って、何にも分からないからですね、言われるがまま「そうなんですね」って言ってたんです。

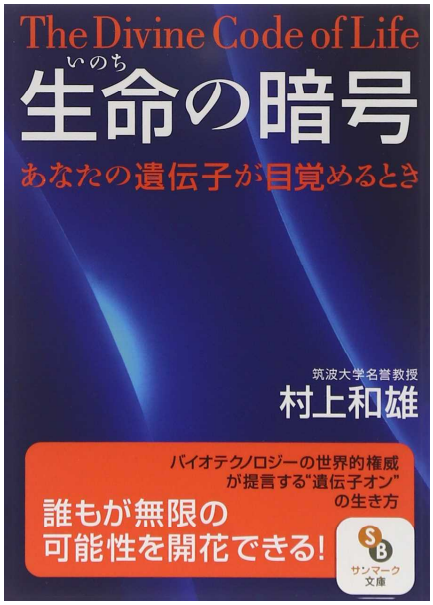
そして三十回の放射線の治療を受けました。
するとですね、25回ぐらい受けたら、毎日軽い火傷をしているような状態で、皮膚がただれてきたんですね。
ヒリヒリヒリヒリして排泄するのも染みて痛い。
もうトイレに行きたくなったら自分で涙が出るぐらい“痛いよ、痛いよ！”と思うぐらいのが25回を過ぎたた頃です。
そしたら主治医がですね、
「もっとひどい人がいっぱいいるからね。 あなたはまだいい方だよ」
とか言うんですけど“絶対いい方じゃない”と思いながらですね、赤くただれた皮膚を“あと何回、あと何回”と堪えながら・・・。
“あと何回したら家に帰れる”、“ラルス三回したら家に帰れる”と思いながら・・・。
家に帰られるということが、その時の私の目標でした。
なぜなら、高校三年、高校二年、小学校六年、三人息子が家で待っていたので、旦那も入れて男ばっかり四人ですね。
大変な中入院をしたので、早くお家に帰って、お弁当を作って上げたり、いろんなことをしたいなって本気で思っていました。
でも先生は、私が帰れるような話は一切されず、
「ものすごく状態が悪いんだよ」というような話をいつもされてました。
私は状態が悪いという意味が分からなくて・・・、実は気分はとってもよかったんですね。

でも、そのラルスの一回目の治療、30回の放射線治療が終わってするラルスの一回目の治療がどんなのかも知らずに、呼ばれたので地下室に下りていこうとしたら、看護師さんがですね、
「待ってくださいね～」て言って、「タオル持ってくださいね～」って叫ばれるんですね。
実は首からタオルを下げていたんです。 暑かったから。 7月ぐらいだったんです。
ガンですと言われたのは5月の1日でした。
で、7月ぐらいにラルスだったんで。 6月の終わりぐらいだったかな。
で、暑かったんで、タオルをかけて歩いて行ってたら、「タオルを持って行ってください」て言われて、“わ～この看護師さん、目が見えないのかな”と思って、「持ってますよ～」と言って見せたんですね。

そしたら「違います。 口にくわえるタオルです」とおっしゃったんです。
私はもうそれを聞いた瞬間、顔色を失いました。 ビックリして。 ぞっとして。
何が起きるんだろうと思ってですね。
そして終いには何を考えたかというと、その市民病院の売店には、口にくわえるタオルというのが売ってるのかなと思いました。
いやいやいや、そんなことはないと思って、自分の病室に帰って、タオルを持って地下室に下りて行きました。
するとそこには技師の先生が三人ぐらいいらして、「上がってください」と言われて台の上に上がらされて、
「今から治療しますけれども、あなたは1センチも1ミリも動けません。 器具を装着するのに一時間、放射線が一時間、そして外すのに一時間かかりますから」って言われたんですね。
そしてタオルをガーッと口に詰め込まれたんですね。
けどその瞬間から痛くて苦しいって言うか・・・、その膣のところに器具を入れられるんですけど、もう正常な頭の配線が真っ白になって、音を立てて切れるぐらい。
これは治療じゃないとか思って、止めてくれとか、なんでガンになったんだろうとか、もうワーワー泣き叫びました。
そして動こうとするんですが、もうグルグル巻きになってるから全然動けないんです。
私は三時間泣きっぱなしでした。
もう本当にこんなの治療じゃないって・・・、なんでガンになったんだって、そのことばっかり何度も繰り返し繰り返し考えて、悔やんで悔やんで泣いて悲しんで・・・、それまで普通に脳天気に生きてきた私だったんですけれども、その治療だけは本当に耐えられない痛みと苦しみ、先生のおっしゃった通り痛くて苦しい治療です。

三時間経ってその治療が終わって、看護師さんが病室に連れて行ってくださるんですけど、歩くことができないので車椅子に乗せて連れて行ってくださったんですね。
私は初めて、それまで病室で泣いたことはなかったんですが、一晩中泣きました。
はっていって布団の中に潜り込んで・・・、もう本当にたまらないと思って、もうこれは人間扱いされてなかった、みたいなですね、よくわかんないんですけど、いろんな感情が、次から次からやって来て、もう本当に悔しいやら悲しいやら辛いやら、どこにその感情を持っていっていいか分からないぐらい、一晩中涙が流れて止まりませんでした。
実はその時ですね。 これはもう絶対二回、三回受けたくないから、嘘ついて明日いなくなろうって思ったんですよ。
病院を抜け出そうと思って。
けどあまりのショックで嘘も考えつけないんですよ。
もう本当にひどい状態で・・・。
後で看護師さんから教えてもらったんですけど、この治療をしてる人ってあまりの辛さに時々いなくなるそうなんです。
ですから私も二十四時間見張られていたそうなんです。
“この人いついなくなるだろう”って見張られていたそうです。

とにかくあと二回、なんとかあと二回を乗り越えたら家に帰れる、病院には二度と来ないって本気で思いました。
数日経って二回目のラルスの治療の時に、私は三男が通っている学校の PTA の役員をさせてもらってました。
その役員仲間が茶色い封筒を、「教務主任の先生から預かってきたわよ」って持ってきてくれたんですね。
それでなんだろうって思って開けてみたら、お手紙がついた一冊の本でした。
で、お手紙には、
「いつもニコニコ子どもたちや学校のため、役員活動ご苦労様です。どうかこの本を読んで元気になってください」と書いてあったんです。
私は本を読んで元気になるという発想がなかったので、“あっ、そんなこともあるのか”と思って、次の日の痛い治療を忘れるために、その本を読み出しました。
それは筑波大学の名誉教授の村上和雄先生の、遺伝子のことがたくさん書かれている本でした。
今はコンピューターが発達して、こういうふうにして遺伝子のことが分かったんですよ、ということが、十年前なんですが、書いてあった本です。
書名は『生命の暗号』と書いて、あれは『生命（いのち）の暗号』と読むんだよ、と村上先生はおっしゃっていました。



生命の暗号（サンマーク文庫）
村上和雄　著

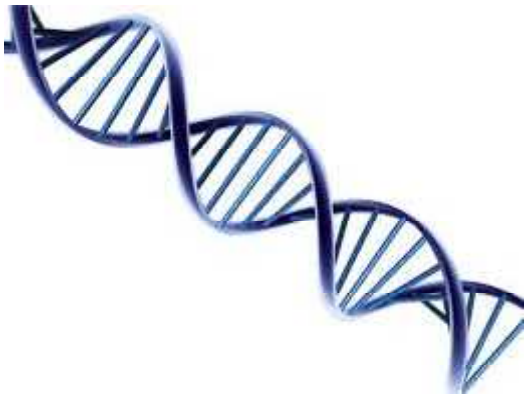
その本を受け取って読みはじめたんですね。
次の日のことを忘れようと思って･･･、とにかくもう忘れよう、忘れようと思って･･･。

そして読みはじめたら、その本の中には、私の知らなかった遺伝子のこと、ここにいらっしゃる皆さんは、そんなの知ってるよって方が多いとは思うんですが･･･。
私はだいたい本を読む人ではなく、暇もなく、子育て一生懸命、会社にも勤めていましたので、本当に寝る時間もないぐらい無我夢中でやって来ました。
ゆっくりとする暇もなく、本当に平均睡眠時間は三時間もなかったと思います。
早番、遅番のシフトのある会社でしたし、他の店でトラブルがあったら、指導係もしていましたし、トラブル処理もしなさいということだったので、別の店舗で何かトラブルが起きたら、夜中の一時

に自分の店が終わったら、次の店に呼ばれるんですね。
そこに朝方四時ぐらいまでいて、そしてデータが合わないということで、その店の店長たちと一緒にズーッと計算して、数字が大好きなんで・・・。
朝の四時までいて、そして帰って、子どもたちの弁当を作って、そして次の日早番だったらそのまま寝ないで仕事に行くっていう、それが普通だったんですね。
そして会社にはたくさんお店があったので、いろんなところのトラブル処理とか掛け持ちでしなくてはならない。
ストレスもいっぱい抱えていまして“なんで私がせんといけんと”といつも思いながら、これは“私と同じぐらい仕事ができる人を作らないかん”とかですね、そんなことを考えながら、必死で、もう無理して無理していたんだと・・・、今思えば、それがガンになった原因だったかなと思います。

そして必死に働いてきて、子どもたちのために早く帰ろうと・・・、とりあえず明日の治療、この本を読んでなんとか乗り切ろう、そう思って読みはじめたその本の中に、私が感動して、感動が止まない、今でもそのことを思うと涙が出るぐらい感動して仕方がないということが書いてありました。
それは何かというと、遺伝子の働きですね。
人間の遺伝子の能力が100あるとしたら、そのうちの3～5しかスイッチが入っていなくって、95％はなんであるのか分からないけれど眠ったまんまだ、ということが書いてあったんですね。
生まれてから死ぬまでの間眠ったまんまの遺伝子が95％もある。
細胞というのは60兆個、60キロの体重の人に60兆個・・・、村上先生に「本当ですか？」って聞いたら、「数えたことない」って話しておられました。

だいたいとか・・・、「えっ、そんなんで発表していいんですか？」って言ったことがあるんですが、まあだいたいそうなんだそうで、60キロの体重の人に60兆個の細胞があり、その細胞ひとつひとつに遺伝子があって、皆さんご存じですよね、あのらせん状になったものに遺伝子の暗号が書いてあって・・・。



何に私が感動したかというと、遺伝子の暗号は、誰かが書いたから科学者が解読したんだよ、そしてそれを書いた人をサムシング・グレートと村上和雄先生が名付けられたんですね。
私は単純だからですね、サムシング・グレートをすごいなって思ったのは、この遺伝子は目になったり、心臓になったり、爪になったり、髪になったり・・・、私に何ひとつ文句言わずにですね、これまでの人生を黙って応援し続けてくれたすごいものだったんだと思ったら、嬉しくてですね、95％も眠っているにも関わらず、私が「心臓止まれ！」って言っても止まることなく、私の人生をずっと支えてくれていたんだと思うと、本当に有り難くて有り難くて嬉しくて、すごいなと思いました。

そしてその次書いてあったのは、その遺伝子の重さ、地球上のすべての人間の遺伝子を取り出してひとまとめにしても、なんと、米粒一粒の重さにもならない・・・。
みなさん想像してみてください、米粒ひとつ、想像できますよね。
あれがですね、仮に地球上の人間が70億人いたとして、その70億分の一が自分の遺伝子で、そのまた60兆分の一が一個の遺伝子なんですよ。
その一個の遺伝子に、村上先生は辞書三千冊分の文字が書かれていて、それを科学者が解読したんだって書いてありました。
ものすごく小さな小さな小さなものが、人間を支えてくれているすごいものだ、私はその時思ったんです。
私の主観ですけどね。すごいな～と思ってですね。

そして更にもっと涙が出るぐらい感動したこと・・・。
それはお父さんとお母さんの染色体が23個ずつ、その23個の組み合わせ抽選で一人の人間が生まれてくる。
「これはまさしく奇跡です」と書いてありました。
科学者が奇跡という言葉を使う、これはすごいなと思いました。
奇跡なんて言葉を使うんだ～、この先生すごい、面白いと思って・・・。
そのひとつの組み合わせが生まれる確率が70兆分の一、想像もできないような70兆分の一の確率、そこに分かりやすく言うと、とあり、
「一億円の宝くじに百万回連続して当たる確率と一緒」と書かれていました。
けど全然分かりやすくないですよね。
そんな人もいないし、聞いたこともない、一億円の宝くじが百万回連続して当たるような確率で、すべての人が生まれてきた・・・。
私はその言葉が忘れられないっていうか、本当にその言葉を読んだ瞬間、嬉しくて嬉しくて嬉しくてなりませんでした。
我が子を思うと70兆分の一、自分も、家族も、そして町中の人が、熊本中の人が、みんな70兆分の一・・・、そう思うと愛おしくてですね、嬉しくて、もうあの時の感動は、今あの時から十年経っても、あの時の感動は忘れることができません。
「日本中、地球上の人がみんな70兆分の一、すごい!!」って、私は感動しました。

そしてその次の瞬間何が起きたかっていったら・・・、私は時々不思議な話をしますけれども、夢か幻か気のせいか分からないんですけど、「地球上のすべての人が」って言った瞬間、私の意識は地球上から飛び出していました。
そして地球を抱っこするように、もう愛おしくてならない、この地球上のすべての人々・・・、生まれてきてよかった、70兆分の一なのよ。
是非みんなこれを知って、自分の生命を大切にしたらいいのに、いじめや自殺がなくなればいいのにとかね。
そう自分にものすごく思い込んで、70兆分の一よ!なんでもできるよ!
いろんなことを思って、感動して、素晴らし～い、人間に生まれて本当によかった、なんて素晴らし

いんだろう・・・、地球を抱っこしながら眺めていました。
そしたらまたドンドンドンドン自分の体へ戻って行くんですけど、宇宙から自分の体へ戻っていく時に、地上はいっぱいいろんなところが光っていました。
ものすごくキレイに光っているんです。
私は何が光っているんだろうと思って見てみたら・・・、人間が光っていました。
ものすご～くキレイだったんですよ。
もうキラキラキラ・・・って。
70兆分の一だからね、輝くよね、光るよね、すごいよねって、ものすごく感動して、体にだんだんと戻っていくんですが、また人間とは別のものがものすごく光っていた。
それは何かっていうと、自然が光っていました。
人間と自然の光は違っていて、質が違うというか、色が違うというか・・・。
人間を愛おしむような、「ついているよ。 守っているよ」そんなことを言っているかのような、優しく包み込むような光で輝いていました。

わ～地球ってすごいって本気で思って、自分の体の中に入った時に・・・、私は意識が変わったんです。
どんなふうに変わったかっていったら、「自分は生きているんじゃなくて生かされているんだ」って本気で分かりました。
あの日から私は生かされているって感じ、もう自分が生きているって言ったことはないです。
「遺伝子はね、その人がどんなわがまま言おうがその人を一生懸命支えてくれてね、みんな生かされているんだよ」って言える自分に変わりました。
「生かされているよかった～!!」、私は夜中にその本を読んでしまって感動して泣き、泣いて泣いて泣いて・・・、人間に生まれたことが嬉しくって仕方がない。
しまいには大きい声で「バンザ～イ!! 人間に生まれてよかった!!」って叫んでました。
叫んでも全然誰にも迷惑をかけずに。
なんでかっていうと、私以外のガン患者さんはみんな睡眠薬を飲んでグーグー寝ていたんで、私だけしか起きていなかったんですね。
私とっても・・・、どうとられるか分からないんですが、わがままって言えばわがままなんですが、寝たい時に寝ればいいって思う人なんで、せっかく入院できてね、私はそれまで毎日三時間も寝ないような生活をしていて、入院って聞いて、“わ～っ寝られる”って思った人だったから、「もう睡眠薬いりません。 好きなようにしています」って、睡眠薬を飲まず過ごさせていただきました。
熱が出ても熱冷ましも飲みませんでした。 注射も打ちませんでした。
私は40度ぐらいの熱が一週間ぐらい続いた時に、主治医から検査をしますか、どうしますかって聞かれた時に、「私が選択をしてもいいんですか？」って聞いたら「ハイ」とおっしゃったので、
「じゃあ何度まで上がるか見てみましょう」って提案したんですよ。
そしたら先生が、「うん、見ましょう・・・。 分かった」って、鉄仮面の先生は、
「僕も見てみたいから」って、私がどんだけ熱があっても放置されていましたけど。
そんな感じで、誰も起きていない夜中に本を読んで、
「もう最高だ～、最高だ～、人間に生まれてよかった!!」って村上先生の本、この本を書いてくれた先生にお礼を言いたいぐらい、有り難い有り難いって本気で思えるぐらい感動しました。

けどふと我に返って素に戻った時に、明日めちゃくちゃ痛い治療をするんだ、ラルスの二回目だって思ったんですね。
けどそこは・・・、私は変わっていますねって言われたら致し方ないんですが、70兆分の一の確率で存在する人間であると知ったからには、これは遺伝子にお礼を言わなくてはならないと本気で思いました。
もう遺伝子がいくつあるとか、何回言わなくてはとか、そんなことは関係なく、遺伝子にお礼を言おうと、なりふり構わずお礼を言いました。
「まずどこから言ったんですか？」とよく聞かれるんですが、まずは正常に働いている部分から言いました。
メガネをかけていますが目とか、耳とか、きちんと動く手とか、歩ける脚とか、髪の毛とか、いろんな内臓とか・・・。
もう何個あるか分かりませんがそこに集中して、“本当にありがとう。 自分を支え続けてくれてありがとう”ってず～っと言い続けて、次の日のラルス、名前を呼ばれて放射線科に下りて行くまで、一晩中、もう本当に一睡もせずにず～っと言い続けました。

もう言い続けて、言い続けて、言い続けて・・・、名前を呼ばれ、タオルを二枚、首から下げて、口にくわえるタオルを持って放射線科に下りて行きました。
で、下りて行って、その地下室の放射線科のドアを開ける瞬間、立ち止まって、“そうか～、私は今からすごく痛い治療をするから、私はガンにお礼を言わんといかん”と思って、
「今から痛い治療をするんだよね。 ごめんね」って、
「今日は私が痛いとか苦しいとかは一切構わないから、どうか子宮の私のがん細胞よ、
　どうか今日は痛くならないでね・・・」
そしてドアを開けた瞬間に、ガン細胞に「心から愛してるよ」って言いました。
もう私のガン細胞だから消えなくていい、このままあっていい、私はもう死のうがどうしようが全然構わないから、もうごめんね～、今まで有り難うね～、愛してるよ～、本当に有り難うって言って治療室に入って、前回と同じようにグルグル巻きにされて、耳元で「三時間動けません」て言われて、口にタオルを入れられて、もう覚悟して、痛いだろうなと思ったのに、はじまっても一切痛くなかったんですよ。
私ビックリして、今度は人間て何なんだろうと思って、人間てすごいとかね、夕べさんざん喜んだその成果なのか、たくさんありがとうを言ったのを聞いてくれてたのか、最後に痛くならないでねって言ったのがよかったのか、もう何がよかったのか分からないんですが、もう一切痛くなかったんですよ。
もう痛みがなかったのが嬉しいんじゃなくて、この不思議な人間に生まれてきたことが有り難くって有り難くって、三時間泣きっぱなしでした。

で、三回目も痛くなくって、その放射線の治療は効果が一ヶ月半あるらしくて、また一ヶ月半後に来てくださいということで、家にやっと帰れました。

そして一ヶ月半後に再び病院に行って、レントゲンとか診察をして診てもらったら、その鉄仮面先

生がですね、ウフフ・・・とか笑うんですよ。
なんで笑うのかなと思ったら、全部消えているって言うんですよ、子宮ガンが。
「僕の腕がふるえない。 残念だ。 骨まで広がってどうにもならないような子宮ガンなのに治ってる。 キレイになってる」って言ったんです。
“わ～鉄仮面の先生笑うんだ～”って思って、先生がウフフって言ったら私もウフフって返して、
「そんなことあるんですね」って喜び合ったのも実は束の間で、十分ぐらい先生といろんな話をしていたら、また放射線科から電話がかかって・・・、かかってきた瞬間“イヤだな”って思ったんですけど。
イヤだなって思ったのは的中して、今度は肺と肝臓に転移をしていると言われました。
私の場合、肺は上から下まで水玉模様、誰が描いたんだろうって思うぐらい大小キレイな水玉模様で、それが上から下までギッシリとありました。
それから肝臓は、肝臓の中にこぶし大のガンがあります。
そして表面にも種をばらまいたようにいっぱいあって、
「この状態で起きて座っている人を見たことがない・・・」、肺の先生も肝臓の先生も、わざわざ来て説明なさいました。
これで起きている人を見たことがないから、痛いだろうとか苦しいだろうとか聞かれるんですが、なんともなかったんで、「大丈夫です」って答えたら、
「いや、大丈夫じゃない。 即入院」と言われ、「けど今日は帰りたい」と答えたら、
「なんでですか？！ 倒れたらどうするんですか？」と言われました。
「その時は救急車で来ますから」と言いながら、なんでですか、なんでですかと主治医と肺と肝臓の先生、三人の先生が言われ、「即入院だ」と言う先生に、「私今日はパジャマを持ってきていないから」と答え、「それが理由ですか！」と言われ、結局「帰っていいです」ということになって帰りました。

私の主治医は、せっかく子宮がキレイになったから、今度は抗ガン剤を打ちたいと言いはじめたんです。
抗ガン剤ってよく分かんなくて、もし間違ってたら申し訳ないんですが、その人のいい細胞にまでダメージを与えて、その人の免疫の力にかけるみたいなことを以前本で読んだことがあったので、これイヤだな、したくないなって思って、すごく頑張ったんです。
しません、しませんって・・・頑張ったんですけど、とうとう主治医が私の家族を呼んで、主人のお姉さんたちまで呼んで説明があって・・・。
「僕としてはですね、抗ガン剤をしたいと思います」って言って、そしたら主人とお姉さんたちまで立って、「お願いします～！」て多数決で負けたんですよ。
反対なのは私一人でですね、“多数決で負けるってこれどういうこと？”って思ったんですけど、
先生も助けたい、この人の命を救いたいと一生懸命おっしゃってくださるので、まあありがたいなと、そこは受け取らんといかんなと思って、受けることにしました。

その代り先生にですね、抗ガン剤を打つ時にお願いをしました。
「先生、これが私にとっていい効果のある薬になるように祈ってください」って言いました。
そしたら先生が、「祈ればいいんですか？」って言われて、

「一日一分とはい言いません。 十秒ぐらいでいいいので、打つ前に祈ってください」て言ったら、「分かりました！ それでいいなら」って「それだけで打ってくれるんですか？」みたいなことを言って、「ええ分かりました」って言って打ったんですけど、先生も祈り、私も祈りました。
抗ガン剤は二回打って、もし効果がなかったら治療は一切しませんとおっしゃったんですね。
その時先生に「あとどのぐらい生きられますか？ 私には子どもがいるんで、そのことを知りたい」って言ったら、先生が、「一ヶ月生きられません」て言ったんです。
その時に、「この状態で一ヶ月生きられた人は見たことがないから、早めに段取りをして、会いたい人には会ってください。 生きられないってことをハッキリ言います」とおっしゃいました。
「せっかく子宮はキレイになったけれど、もう生命はないだろう」、そう言われたんですね。
だから先生に聞いたんです。
「一ヶ月生きられないのになんで二回打つんですか？」って、「計算合いません」って言って。
そしたら「そこは計算しなくっていい」って言われたんです。
「けど計算合いませんよ」って、先生にちょっと食ってかかって・・・、それでも二回打って検査をしたら、肺の転移が少しと肝臓のが少し消えていて・・・、先生が「僕が祈ったからだよ」とか言われて、“違うだろうな～”と思ったんですが・・・。

私はず～っと“ありがとう”って言い続けていたんで、もう本気で言い続けていました。
もうあの人頭がおかしいって思われるぐらいに、ず～っと自分の内側に入って、ありがとう、ありがとう、ありがとうって言ってました。
そして抗ガン剤を一回打った時に、二十日ぐらいで頭皮が痛くなって、枕に頭を置けないんですね。
チクチクチクチクして、もう痛くてたまらないんですね。
で、立っていたら、バサッって音がするから振り返るとですね、畳の上に私の髪の毛が固まって落ちてるんですよ。
ドバッと落ちてて、もう本当にショックで・・・、髪の毛が抜けるかもとは聞いてはいたんですが、もうそれを見た時は本当にショックでした。
で、それを握ってごみ箱まで持って行くんですけど、捨てられないんですよね。
なぜかっていうと、村上先生の本を私は読んでいるので、この髪の毛も私のために今まで支えていてくれた、そう思った時にですね、もう“髪の毛一本一本にお礼を言ってから死のう”そう本気で決めました。
死ぬ気満々だったんで、“これを言ってから死のう”と思って・・・。
今度は大変なんですよ、お風呂場で髪の毛を洗った時とかてすね、お風呂場で髪が流れていかないように、いろんなものを敷き詰めて、集めて集めて集めて・・・。
きっと主人や子どもたちの分もあったと思うんですが、もうイヤというほど集めて、毎日ありがとうってするんですけど、終わらないんですね。
で、ある本で読んだんですけど、髪の毛って十万本ぐらいあるらしくって、もう終わらないんです。
何回も何回も何回も言うけど終わらない・・・。

そしてある日、ものすごい早い時間に、まだ9時にならない時間に、子どもたちが「お休み～」って言って寝てしまったんですね。

で、主人も早く寝たので、今日は全員いないから、今日はいい感じだから早く終わらせようと思って洗面台に行って、また拾った髪の毛を取り出してですね、もうその時は髪の毛が一本もない状態で、そして一本ずつ髪の毛を握って「ありがと～」って言って、また握って、「今までありがと～」とか言って、その作業をず～っとしました。

皆さんは五千回とか一万回とか、続けてありがとうって言われたことがありますか。
あのですね、またまた不思議なことが起きたんですけど・・・、ものすごい回数ありがとうって言うと・・・、私の中では一万回ぐらい言った頃だと思うんですけどね、自分の口でありがとうって言うと、ありがた～い気持ちが降ってくるんですよ。
ありがとうと言うと、ありがた～い気持ちが降ってくる。
そのありがたい気持ちがですね、ものすごく小さな雪のようなものが、自分の胸の中に降り積もっていって、もう言うたんびにありがたい気持ちになり、言うたんびにありがたい気持ちになり、これはとっても止められないいい気分になって・・・。
もうさらにいい調子になって、“わ～いい気分だ。 今日は絶対に終わる”って思いながら、もうじゃんじゃん続けて“ありがとう”、“ありがたい”って・・・、そしてそのありがたい気持ちがいっぱいになって、とうとう胸のあたりからですね、あふれ出して・・・、もうはじけたんですよ。 ブワーッって。
もう胸から吹き出すんです。 言えば言うほどブワーッって吹き出すんです。
言えば言うほどありがたい・・・。
もう髪の毛がない、ガンで死ぬ、もうそういったことは一切どうでもよくなりました。
もうそういうことは私の中ではどうだっていい、こんなありがたい幸せなことはないっていうぐらい、自分が言ったものすごい数のありがたいの効果で、ありがたい気持ちをたくさん受け取って、最高の幸せな一時を過ごしました。
あまりのありがたさに涙が滝のように流れるんです。

悲しいんじゃないんですよ、うれし涙がボワーッて出てきて、とてもいい気分でじゃんじゃんやってたら、夜中の三時ぐらいだったと思います、当時高校二年生の次男が洗面台に入ってくるんですよ、ガラッと戸を開けて。
そして髪の毛を握って、髪の毛のない泣いている私、その母親の姿を見て、その高校二年生の次男は、私に向かって何て言ったと思います。
あのですね、「母さん、この特別な状況を楽しまんといかんよ」って言ったんですよ。
私はビックリしてですね、たぶんその時、眠っている遺伝子のスイッチがきっと入っただろうと思いました。
もう本当にビックリしました。
よくこんなことを私に言えるなと思って・・・。
そして考えもつかないそんな言葉を息子が私に言ってくれて、しかも楽しめ・・・。
よく考えてみたら、私の人生の中で選択肢がたくさんある中で、楽しむという選択をひとつもしてこなかったということに、その言葉を聞いた時に気が付きました。
これはまず息子にお礼を言わんといかんと思って、髪の毛のない頭を息子の方に向けて、
“あなたを産んでよかった”ではなくて、私の息子も70兆分の一の存在ですから、
「私の息子に産まれてきてくれてありがとう」って本気で頭を下げました。

そして息子に聞いたんですよ、
「あなたならどうやって楽しむ？」って聞いたら、「いつもしないような化粧をして、いつも着ないような服ば着るたい」って言ってくれました。
そして「僕がバイトしてカツラば買ってきてやるたい」って言ってくれたんです。

そしたら四日後ぐらいだと思うんですが、息子は本当に買ってきてくれました。
茶色いパンが入っているような袋を持ってきて、ハイって渡してくれたんで、わ～なんだろうって思って、パンかなって思って、えらい軽いね～って思ってこう開けて、手を突っ込んで中のものを出そうとすると、値札が一番先に手に引っかかったんで、その値札を引っ張り出して見ると、3,999円だったんですよ。
も～毎日ありがとうって言ってるけん、わ～すご～いって、やっぱ私すごいねって思って、サンキューだわとか言ってですね、もうすごくいい気分で嬉しくて、もう全部引っ張り出してみたら、まっ金々だったんですよ、カツラが。
もうどこのオーネーチャンが被るんだろうっていうようなのを息子が買ってきてくれて、“え～私これ被らなんと”と瞬間思ったんですが、せっかく買ってきてくれたんで、「これ被って楽しむね～」って言って。
本当に似合いもしないんですけど、そのまっ金々のカツラを被って、出かけ、過ごすことにしました。

毎日髪の毛にありがとうを言ってやっと終わったら、私のお友だち、その本を持ってきてくれたお友だちがやって来て、
「あのね～、毎朝朝日を浴びるといいらしいよ」とおっしゃってくれて、「分かった」って言って、
毎朝早く起きて朝日を浴びながらお礼を言って、いい気分でいい気分で楽しみました。
もう息子から言われた楽しむっていうのを絶対実行してから死のうと思っていたんで、毎日私は楽しもうと思って過ごしていました。

抗ガン剤は六回打ったんですが、免疫力はどんどんどんどん落ちていくんですよ。
風邪を引いたら肺炎になって死んじゃうってぐらいの免疫力になってしまって・・・。
白血球数が500とかになったら無菌室に入らなくてはいけないとか先生が言われたんで、まだ500にはならないうちに、先生にちょっと相談をして、「私ですね・・・」って。
ものすごく気分はいいんですけど・・・、いっぱいありがとうって言っているからめっちゃ気分がいいんですよ、そのありがたいからですね・・・、ありがとうって言ったらありがたいからいい気分なんですけど、先生に泣きながら嘘ついてですね。
「あの・・・、どれぐらい生きられるのか分からないんだったらあとは子どもと過ごしたい・・・」とか言ってですね、先生に嘘ついて、「きつくて辛いです！」って言って泣き落としで・・・。
とんでもないんですよ。 本当に元気なんですけど、いい気分なんですけど帰って、朝日を浴びて、毎日感謝して楽しんで過ごしておりました。

5月の1日にガンと言われて、次の年の三月か二月の終わりぐらいに CT を撮って、三月半ばぐらいに結果を聞きに行ったら、全部消えていました。

ものすごいスピードで転移したガンは消えていました。
そしたら主治医から、骨にもガンがあったらしくて、「腸骨の根元にも実はあったんですよ」って言われました。

私はそれを聞いてちょっとショックで、「なんで教えてくれなかったんですか？」って言ったら、
「いやいや、あなたは肺と肝臓で死ぬところだった」って、それでもう言わなくてもいいだろうって勝手に思ったって。
けど十月ぐらいにですね、骨のガンが二回ぐらい痛かったことがあって・・・。
骨のガンの痛みって経験ある方おられますか。
私はものすごく痛かったんです。
歯の痛みがあるじゃないですか、あの歯の痛みの千倍ぐらい痛かったんです。
もうめちゃくちゃ痛い、本当にもう身を置くところがない、誰か助けてくれとか、頭のてっぺんにまで痛みが抜けるぐらい・・・。
でもある人が教えてくれたんですよ。
「痛みにありがとうって言いなさい」って、で、私はその骨の痛みがある時に、その時私は骨にガンがあるって思ってないから、なんでここが痛いんだろうぐらいにしか思ってないから、“ああ、それを試してみよう”と思って、素直に試してみました。
30分ぐらい言ったら痛みはピタリと止まって、夜眠れたんですね。
あ～よかったと思ったら、また朝方5時ぐらいになったらまた痛くなって、もう二回目痛くなった時には、泣きながらありがとうってその痛みに言い続けました。
そしたらまた30分ぐらい経ったらまたピタッと止まったんですよ。
私は本当に泣きながら言いました。 泣きながら、泣いて泣いて、痛いって思いながら・・・。
でもね、30分ぐらい経ったらピタッと止まって、それっきり痛くなかったんですね。
後から先生に骨にガンがあったって聞いて、あれは骨の痛みだったんだなって、後で分かりました。

私は人生の中で、必要な人が必要な時に現れて、必要なメッセージをくださるということが、たくさんあるんですけど。
ガンの時も、市民病院に診察に行っている時、金髪のカツラを被ってですね、座っている時、全然知らない高齢の女性の方が、最高の笑顔で、「どこが悪いの～？」って言われたんですよ。
ものすごくいい笑顔だったから、その笑顔に負けない笑顔で、「ガンです～」って答えたんですね。
「ガンなんです～」って。
そうしたら、「あらよかったわね～」って言われたんですよ。
もう思いもかけない「あらよかったわね～」を聞いた瞬間に、笑顔が出なくなって、その人に真顔で「何でですか？」って聞いたら、「あのね～、人はガンで死なないのよ～。 人が死ぬ時は寿命なの」って言ってくれたんですよ。
私にとってそれが救いでした。
“あっ、私ガンで死なない”って本気で思いました。
まだガンがある時にですね、そう言ってくださって・・・、“気の持ちよう”っていうかですね、病気というのは“気が病む”と書くので、やっぱりそう思うのは人の勝手ですからね。

私はガンで死なないって思ったら、本当に今生きてますけど、生かさせていただいています。
そうやって思うのもよかったんじゃないかなって、え～本気で思いました。

ガンが消えてあまりの嬉しさに、村上和雄先生にファンレターを書きました。
一部始終をギッシリ書いて、息子から「この特別な状況を楽しめ」って言われたことも書いて送りました。
そしたら村上和雄先生が、住所と名前だけだったんですけど、私の家の電話番号を調べて、お電話をくださいました。
その電話を受けたのは高校二年の次男なんですけど、『熊本に講演に来るから、10時半にどこどこに来るように。　筑波　村上』って書いてあったんで、「今日はじいちゃんが電話してきたよ～」って言うからですね、「ウチはじいちゃんおらんよ～」って言ったんですね。
軽～く受け流して、“この子何言ってんだろ”って思いよったら、
「いやいや、筑波の村上って言ったよ・・・」って、それで「ホントに～！」って言って、喜んで、その先生が言われた時間に合わせて先生に会いに行きました。

その時はまだカツラだったんですね。
で、会った瞬間私を見た時に、先生はこうおっしゃいました。
「君の息子は何者だろうね」って・・・。
とっても息子のことに興味があったみたいで。
「私も何者か分かりませんけど」って、「けどもうあと二人いるんですよ、変なのが」みたいなことを言ったのを覚えていますけれどもね。
で、先生が、「それがカツラかい？」って言われて、「ハイ」って言って、「うん、まあ、似合ってるよ」ってみたいなことを言われて・・・。
その時にお時間があったので、村上先生と二人で、私初めてお会いするんですけど、本当にすごい先生だって、雲の上のような人だって、自分で思ってて・・・。
なぜかって言うと、ダライ・ラマさんとご親友であったり、天皇陛下と一緒に食事をされる方なので、こんな私のような者と気さくに話をしてくださるとは思っていなかったんで、
「先生、聞きたいことがある」って言うと、「なんだい」っておっしゃったんで、
「今最先端の科学は何？」って聞いたんですよ。
そしたらね、祈りでもって病気を治してるって・・・。
アメリカが、大きな大学で当時国家予算で200億円とか400億円とか使って、祈りで病気を治すことをしてるよっておっしゃったんですね。
私はそれを聞いた時に、ものすごく嬉しくなりました。
なんでかって言うとね、祈りって目に見えない力じゃないですか、でもそこに力があるんだって、科学者が認めようとしているというか探しているっていうんですから・・・。
で、その祈りは効果があるんですかって聞いたら、「それが効果があるんだよ」って。
その時おっしゃっていたのは、祈られている人には、祈られているということを知らせないで行ったそうです。
でも効果があるそうです。

で、今年の四月に、自分の本の出版記念講演を出版社からさせてもらって、その時村上先生がゲストで来てくださったんですけど、村上先生と話した時にね、村上先生が、
「僕はさらに心と遺伝子がつながっているということを証明したいから、真言密教でどういう影響　があるかということをデータで取っていて、それをこれから本にするんだよ」
ということを話しておられました。
私がいつも最先端は、最先端はと聞くもんですから、そういうお話をしてくださいました。
目に見えないところにそういう力があって、すごいなって思いました。

それ聞いた時に、マイナスの言葉を言うと、マイナスのことが起きるかなと思って、プラスを言おうと思いました。
プラスを言い続けると、いいことばっかり起きて、幸せな気分でいられるので･･･。
何百人とガンの方たちが訪ねてこられるので、いい気分でいられるように、そういうお話をさせてもらっています。

もうひとつだけ、ここにいる皆さんに特別なお話をします。
一番最初にお話をしました。
あまり講演会で言わない話なんですけど･･･、私は退院する時に、主治医から退院療養計画書というのをもらったんです。
熱が出たらどうしなさいとか、何かいろいろ書いてあったんですね。
患者へ･･･主治医、とあって･･･。
退院療養計画書をもらった時に、私ものすご～く気分が悪くなったんですよ。
二時間ぐらい具合悪くて、これはやっぱりガンのせいで具合が悪いのかなって思って、まだ子宮のガンが消える前、退院して、一ヶ月半後に来なさいって時に先生からもらった退院療養計画書。
そしてなんで気分が悪いのか分かんなくて･･･、私はやっぱり具合が悪い、これはガンなんだろうって、すごく心配しました。

けれど二時間経って、ふとその理由が分かったんですね。
だいたい私は人から嫌み言われても分かるまで三日ぐらいかかるんですね。

三日ぐらい経って、“ハッ、あれは嫌みだったんだ！”ってことがよ～くあるんですけど、もう三日経ってるからどうでもいいんですよね。
で、言った人が残念だろうなと思って･･･。
だって嫌な思いをさせようと思って嫌みを言うんでしょ。
だけど私全然嫌な思いしないから･･･、ヘラ～ッとしてるから･･･、嫌み言った人はとっても残念だったろうなって、いつもそんな感じで思うんです。
私は人を恨んだことがないし、逆に同情するので･･･、私に言ったがゆえに、あなたが嫌な思いしたよねって思うんですね。
だいたい鈍いので、その気分悪い時も二時間かかったんですけどね、理由が分かるまで。

その退院療養計画書をもらって気分が悪かったのはですね、私の人生なのに、なんでこの人が計画を立てるんだろうと思って、これで気分悪くなったんだと思って･･･、それに気がついた時に気分がよくなったんですよ。
で、私は紙を取り出して、一週間後の私はどうしてる、で二週間後はどうしてる、三週間後･･･、
ずーっと書いていって一ヶ月後、ずーっと書いていって二ヶ月後、一年後、そして一年半後、二年。
ずーっと書いていって、自分の退院療養計画書を作りました。
十年分書いたんです。
十年分ですよ、皆さん。
もう私は一晩中寝ずに書きました。
それで嬉しくて仕方がないんですよワクワクして、もう十年越してるって･･･。
だけどおかしいですよね、余命一ヶ月って･･･。
だいたい生命がないって言われてるのに、その退院してからの自分の十年後。
そして一番最後に、十年後どうしてるかって書いたんです。
私は主治医に元気を持って行きます。 検査には行きます。
主治医に元気を持って行きます。 私は元気。 って書いて、「主治医へ」って患者の名前を書いて、次の日先生が来るのがもう楽しみでですね、ワクワクして、どんな顔するだろうと思って、渡そうと思って･･･。

そしたら先生がおはようございますって来たからですね、
「もう～先生、昨日退院療養計画書いただいたでしょ！」って言うと「ハイ」と答えられて、「あたしからです」って渡したんですよ、そしたらすごいビックリして、開いたら文字がギッシリ書いてあるから、本当にビックリして、慌てて紙を畳んでポケットに入れて去って行かれました。
で、どうなったかって言ったら、その次の日かその日にですね、まあ会うはずがないから退院療養計画書をいただいたんですが、また先生と会う機会があって、そしたら先生がこうおっしゃいました。
「あの計画書通りにあなたは生きてください。僕は生まれて初めて、もう生命がない、大変な病気をなさってる患者さんから、十年分の退院療養計画書をもらった。
こんな感動したことはない。
僕が元気になりました」
って先生が言ってくださったんです。

私はなぜこのことを皆さんに言うかっていうと、私、書いた通りになったんですよ。
本当になりました。ひとつも間違っていない。
書いた通りになりました。
皆さん自分の人生ね、本当に変えたい、元気になりたい、何かにチャレンジしたいと思った時に、是非してみてください。
やってみて、なったらいいじゃないですかね～。
プラスのことを考えて、マイナスを言わないで、明るく感謝して、自分の生命に本当にありがたいなと思いながら毎日生きて、そして計画書作って、計画通りに自分の人生がなった時、やっぱり70兆分の一の奇跡で自分は存在しているんだって、さらなる感謝の気持ちがこみ上げてきて、嬉しくて嬉しくてね、幸せで仕方がない・・・、そんな経験をなさるんじゃないかと思います。
人がするわけじゃない、自分でするんですからね、是非やってみて欲しいなと思います。
この特別な話は他ではあまりしません。
どれだけ私が鈍くてバカなのか公表しているようなものなので、あまり言わないんですけどね。

そして私は息子に言われたようにね、自分の人生を楽しんで、目いっぱい大いに人生を楽しんで生きようと思って、『楽しむしか自分にない！』、スイッチを思いっ切り入れて生きていました。
そしたらある日夢を見たんです。
青い空で、天から声が降ってきました。
その声は何て言ったかっていったら、
『たった一人でいいの、困っている人がいたら、あなたは手を差し伸べてね』って言ったんですよ。
“困っている人がいたら絶対手を差し伸べるよ～”って思いながら、目が覚めたんですね。
“なんであんな夢を見たんだろう、きっと毎日自分のことだけを考えて、楽しんで生きていこうと考えているからだろうな～”って思っていました。
そしてその夢を見た日に、当時大阪にいたネパール人のコックさんが電話をしてきました。
何て言ったかっていうと、
「あなたもご存じでしょ、ネパールはとても大変な国です。私は日本でお店をしたい。
　その時、どうか私を手伝ってくれませんか」って電話で言ったんですね。
それを聞いた時に、“あ～朝から見た夢はこのことだったんだ!”
で、私の中に、隣の日本人を助けるのも大変なのに外国人を助けるのなんて大変だ～と思って、そんな～とか、最初は思いました。頭の中をよぎりました。
でも～、ここは村上和雄先生の本を読んでいるので～。
70兆分の一で彼も存在している。
その奇跡の人であるならば、彼の夢を壊すようなことはできないなと思って、私はガンで再発するかもしれない、けど私には従兄弟たちの仲間がいるので、できたらあなたに力を貸そう、そう約束をして、答えはイエスだって返事をしました。

そして本人が前の店との契約が切れるのにそれから三年半かかったんですけど、私はその間、違うことをしたりしながら待ってて、それでカレー屋さんをして、ネパール支援を本気でやろうとして、今やっているところです。

でもこれまでは会社勤めの普通の主婦で・・・、病気もしたし、やはり不安があるし自信もない。
迷いもあるしやっていけるだろうか、起業するってことは大変なことなんだって・・・、見れば見るほど、調べれば調べるほど、その不安がやって来ました。
しかしですね、私は途中で言いましたよね、
『私に必要な人が必要な時に現れて、必要なメッセージは必ず来る』
本当に私はそういった人生で、そんなメッセージをたくさん受け取っていて、私はメッセージを受け取るのがとても上手なんだろうなって自分で思うんです。

福岡である喫茶店に入って、“やっぱり起業って難しいな～”ってへこみながらコーヒーを飲んでいたんです。
そしたらそこに新聞が置いてあって、そこに本の紹介があって目が行ったんですけれども、そこにこう書いてありました。
アメリカの黒人の女性が、「私たちは黒人だけど人間なのよ。差別をしないで」って。
ものすごく苦しい中、「人種差別をしないでください」って世界で一番先に訴えた黒人の女性の言葉が書いてありました。
そしてさらに何て書いてあったかっていうと、
『人生の失敗とは、一歩踏み出して出合ったものではなくて、その一歩を踏み出さなかったこと』と書いてあったんですよ。
私はそれを読んだ時に“あ～カレー屋さんをせな～”と思いました。
これは一歩踏み出してしなさいという天からのメッセージなんだなと思いました。
私はしっかり受け取ったな、ありがたいことばをいただいたなと思って、もうそれがキッカケで、迷いも不安も一切無なく、もうやればいい・・・、もし失敗してもそれは失敗じゃない、もう踏み出したんだからって書いてある。
そこを真に受けてやろうと思って・・・、そしてやろうと決めたら、いろんな応援する方が現れて、いろんなことを助けてくれて、いろんなことを教えてくれて・・・、今では彼らが毎日鼻歌を歌いながら料理を作っているようなお店になってます。

熊本の震災が起こるまでは二つお店がありました。
ちょうどネパール地震があって何人かコックさんを帰していたんですが、「家が大変だから帰りたい」っていうので、「帰りなさい」って言って、「ネパールの震災も支援するから」と言って、復興の祈念の講演を熊本でさせていただいて、全部彼らに持たせてですね、「帰っておいで」って言って帰しました。
そしたら今度は熊本で大きな地震があって、ひとつの店の調理器具、大きな冷蔵庫が壊れてしまったんですが、コックさんを帰していますので、今はひとつの店で大丈夫なんです。

私はたくさん感謝をして、ありがとうを言って、病気が治った話を今皆さんにさせていただきました。
けれど彼らと働いていてね・・・、彼らのネパールというのは極貧の国で、彼らはみんなヒンドゥー教の信仰が篤いんですが、彼らはすごいんですよ。
彼らは朝キッチンに下りてきてキッチンの中に入った時に、必ず水道の蛇口に手を当てたり、その

手を額に当てたりして、
「神様ありがとうございます。 今日もお水を使わせていただきます」って言って、次はガス台に
「神様ありがとうございます～」って言って、今度はナンを焼く窯に
「火を使わせてもらいます～」って･･･、本当にすごいですよ、すごい感謝をして、彼らは大事に大事にいろんなものを使ってくれています。
「美味しいご飯でみんなに喜んでもらいたいから」って言って、一生懸命働いてくれています。
彼らのその姿を見た時に、毎日当たり前のことなんてないんだな～って･･･。
ガンの時はそれが分かったんだけれども、何年も経つとその気持ちも薄れていくんですが、彼らの感謝する姿を見せていただいて、日本は本当にいい国で、つい感謝を忘れてしまうな～って、また気持ちをあらたにし、彼らとともに朝から感謝をさせてもらっているところです。

私がたくさんありがとうを言って、本当は何が一番変わったかっていったら、小さな取るに足らない当たり前のようなことが、ものすごく大きな奇跡であったと気づいたし、ものすごく大きくて大変な悩みだと思ってたものが、実はたいしたことはなかったいうふうに気づきました。

人それぞれだと思うんですが、たくさんありがとうの波動を自分で体験して、幸せになることはできるんじゃないかなって思います。
村上先生もメッセンジャーとして『人間て無限の力があるんだよ』って、いつもおっしゃってくださっていて、それをありがとういう言葉でさらに増幅させ、速いスピードで体験するってすごくいいことなんじゃないかって常におっしゃっておられます。

最後に私は今から何をしたいか、お話しします。
私のところには、ものすごくたくさんのガンの方が会いに来られたり相談に来られたりします。
この間は群馬から、ホスピス行ってくださいって言われた42歳の女性の方が来られました。
結婚していて子どもがいないその女性が、「もうホスビスに行かなきゃって言われた」って友だちに言ったら、その親友が、「じゃああなたは最後に何がしたいの？」って聞いたんです。
そしたらその群馬の女性は、「この本を書いた工藤さんに会いたい」と言ったんですよ。
そしてその親友の女性が彼女を支えて、お連れしてこられました。
ロータスに食べに来られて、いっぱいいろんな話を、私もせっかく来られたんだから特別に時間を作って話をして、「元気になるには自分がいっぱい感謝してね、人じゃなくて自分なんだよ」、
「自分のことをそんなに思ってくれる親友がいることが嬉しいよね」って話をして、彼女は喜んで、「また来る」って帰っていきました。

もうひとつはこの本を読んだ八十歳の男性の方が、カレー屋さんのランチタイムのものすごく忙しい時に、入り口から入ってこられるなりガーッと泣かれたんです。
“わ～今の時間に来られる～”とか思いながらも、「どうしたんですか？」って聞いたら、「工藤さんにお礼ば言わな～」って言われて、「私が工藤です。 どうしたんですか？」て聞いたら、その方がですね、とっても私は感動したんですが、こうおっしゃったんです。
「工藤さんの本を読みました。 私は八回読みました。 そしたら八個の気づきをもらいました。
　私は八十歳です。 八個の気づきをもらって、もうあり得ないぐらい泣きました。

　感動で感動で、何年分泣いたか分かりません。
　その後病院に行きました。すべてのガンが消えていました」
っておっしゃったんですよ。
わ～この人も奇跡を起したと思ってですね～、「素晴らしいですね～」って言って、
「あなたが起した奇跡です。すごいですね～」って。
村上先生が言われる『すべての人には無限大の可能性がある』ってこのことなんだな～って思って、嬉しくてなりませんでした。

また福岡の２８歳ぐらいの女の人が、三歳の可愛い女の子を連れて会いに来られました。
その方は、脊髄にガンが八つ転移していて、骨シンチの検査を受ける、その前に来られたんですね。
本を読んで私に会いたいと来られたんですが、
「まだ子どもの母親でいなきゃいけないよ。親子だから特別の遺伝子で繋がっているはずだから、
　子どもさんの手を握って、毎晩子どもさんと手をつないで寝てね～。いい気分でいるんだよ～」
って話をしたんです。
そしたらその女の人が、帰る時にパッと振り返って、
「実は主人と仲が悪いんです」って言ったんですよ。
わ～この人のガンは、もしかしたらそのストレスからかもしれないなと思ったんで、
「あのね～、ご主人のことは一時神棚かどっかに上げといて～。預けて、いいように計らってくだ
　さいみたいにお願いして。
　もうご主人がどんな顔色になろうが、今はあなたが元気になることが一番なので、自分のこと
　を考えて、いい気分でいるようにして」
「ご主人の顔色見ながら機嫌を取ったりとかそういう場合じゃないよ。
　子どもさんが小さいんだから、お母さんがいなくちゃダメよ」
って励ましてですね、そして私は彼女にですね、
「いい大人なんだから、いい気分は自分で作れ」って言ったんですよ。
そしたらその人は、「分かりました」って帰っていかれて、一ヶ月半経って電話がかかってきました。
「工藤さ～ん！」って電話がかかってきて、もう泣いてるから、よけいに悪くなったのかと思って、
「どうしたの～？」って言ったら、「骨シンチの結果、八つあったガンが全部消えてた」って・・・。
わ～すごいね～って思って、これからガンの人がまたさらにたくさん来るから、その人たちにあなたのことを話してあげたいって・・・。
「あなたは、あなたにとって何が一番効果があったことなのか、私に教えてください」って言ったら、
「工藤さんが帰る時に、いい気分は自分で作れって言ったこと。
　あれが毎日忘れられなくて。毎日いい気分でいました。
　私頑張って毎日いい気分でいたんです。そしたらガンが消えたんです！」
という話をしてくれました。
いい気分でいることは人のせいでも何でもない。自分で作ればいいことだから。
すごいな～って思って・・・。

さらにさらにたくさん、ここではお話ししきれないぐらいご自分で奇跡を起した人たちのお手紙やお電話がいっぱい来ています、
この本（遺伝子スイッチ・オンの奇跡）を書いてくれたのは私の従兄弟で木下っていうんですけどね、彼女がそれらを集めて編集して、実はこの本の第二弾が今年中にできることになっています。
そしてこの「遺伝子スイッチ・オンの奇跡」は、外国の人にも読んでいただけるよう、英語に翻訳されているところです。

実は今月の、致知出版社の致知という本に、村上和雄先生と私の対談を載せていただきました。
私は致知出版社の致知という本が、どれだけすごいかということをまったく知らなくて、本当に何にも知らなくて、致知出版社から電話がかかってきて、「工藤さん、取材したいです」って言われて、
「え～私ですか～」って言って、“あ～村上先生だな～”と思ったから、「村上先生からなんですね～」って言ったら、「ええ、たっての願いで」って言われて、私ね、「お断りします～」って言ったんですよ。
そしたら致知出版社の人が「エエッ～」って言われて、「断るって言われたのは初めてです」と言われて、「ものすごく衝撃を受けました」と言われて、「なんで断るんですか？」と聞かれるから、
「私肩書きがないから」って・・・。
だって皆さんすごい何とか大学の教授とかですね、どこそこ病院の院長とかですね、そういう人たちばっかりが載っている本だと思っているので、「私何にも肩書きがないんですけど～」って言ったら、「あっ、肩書きはいらないんです」と言われて・・・。
「お金出してでも載せてくれという方がいる中、あなた断るんですね」って言われて・・・、やはりものすごく・・、嫌み言われても三日ぐらいかかる人は違いますね。
自分はやっぱり普通の人と違う考え方なんだなって思いながら・・・。

それで村上先生が本当に面白い話をたくさんされたんですけれども、
「自分が知って幸せになれたことは、人に伝えるのが大事なことなんじゃないか」
って、そうおっしゃってました。
世界中の人が君の言うとおり、70兆分の一で、自分の生命はすごいんだ、素晴らしいんだって考えて生きていられたら、いいことは絶対に起こるはず。
自分だけがよかったらいいと思わないで、そして
「70兆分の一の奇跡は、どんなピンチもチャンスに変えることができるんだよ」っていうふうにおっしゃっておられました。
でも取材の中で村上先生はですね、「僕はできんけどね～」とかおっしゃっていました。
「あんまり僕はしたことはない」とか冗談をおっしゃっていましたけど。
村上先生は本当に立派な方で、いいことをたくさん教えてくださって・・・。
「本を書きなさい」って言われるから、「書きます」って言ったら、先生が序文を書きましょうと言ってくださったし、東京で講演をすると言ったら、先生の方からお電話がかかってきて、
「僕も話そう」って、本当に言ってくださったんですよ・・・。
本当にありがたい夢のようなことが、次から次から起きております。

え～ここにいる皆さんには、さっきから話している70兆分の一の奇跡の存在であるということ、自分自身がそうなんだということを、今日はしっかりと受け止めて、それを忘れずに活かしていただきたいと思います。
自分の生命を輝かせてですね、毎日楽しく過ごしていただきたいという思いを込めてお話しさせていただいています。
しかしながら、一週間もすると私の話は忘れるでしょう･･･、それでも構わないんですけど･･･。

私は去年の一月ですかね、震災の記念日に、神戸から講演の依頼がありました。
呼んで下さった方は、余命六ヶ月を宣告された方でした。
その人が自分一人で聴くのはもったいないから、工藤さんがせっかく来るんだったら自分がガンであるという手紙も書き添えて、村上先生の本を読んで元気になった人の話を聞きませんかというチラシをその人は作られて、呼ばれたんですが、130人ぐらいの方が神戸に行くと来られてて、寄り添うように座られていて･･･。
神戸も初めて行ったんですけど、神戸の駅に降り立った時にですね、ものすごく街がキレイになっていて、本当に震災があったとは思えないほどすごい状態で、感動で･･･、もう駅に降りた瞬間から涙が流れて流れてしかたなかったんですね。
何に感動したかっていうと、どんなに辛い目に遭っても、どんなに大変な目に遭っても、人間というのは、泣きながらでも苦しみながらでも、一歩を歩むのを止めないんだっていうのが分かったんですよ。
二十年経ってね、こんなにキレイな街に復活させる力があるんだって思った時に感動で･･･。
やはり村上先生のおっしゃる通り、やはりみんなに無限の力が宿っているんだって･･･。
これがまさしく神戸の人が証明したこと、証だなと思って、感動してなりませんでした。

神戸に行って話をするからには、普通の講演会場ではしないような特別な話をしたい、そう思って、自分の中で宝物と思っているものを持って行きました。
今日ここにも持ってきたんですけどね。
これはコーヒーの空き瓶に入った千羽鶴なんですよ。

この中に千羽入っているんですけどね。
これはですね、私がガンの時に作ったんじゃないんですよ。
私には息子が三人いるって言いましたけど、これは三男がお腹にいる時、「妊娠しましたよ」って教えていただいいて、産まれてくるまでの間に、まだ見ぬ我が子に宛てて書いた私の千の思いが一枚一枚に書かれています。
そういった思いを込めて作った千羽鶴です。
長男の分も次男の分もあるんですけど、三男の分が上手にできたので、コンパクトにまとまって持ち運びにもいいので、持ってきたんですけど。
これを神戸の人のところにも持って行って、お見せしました。
なんで見せたかっていうと、70兆分の一の奇跡のご自身の生命を輝かせてくださいって話した後、その生命は、親御さんが産んで育ててくださったんですよね・・・、私は息子に千の思いでした、千の愛を込めて・・・。
けどここにいる皆さん、神戸の人、世界中の人、どの人にも千以上の大いなる愛、思いを込めて、その一人の人が存在しているってことを、今一度思い出して欲しい・・・、そう思ってですね、この鶴を持って行ってお見せしました。
今日持ってきたのは、皆さんが今ここに存在するっていうことは、どなたかが皆さんを思い、愛し、育んでくれたから、ここにいるってことですよね。
今一度ご自分の生命を振り返って、大切に大切になさってですね、大いなる奇跡を起してください。
私も楽しんでいきますので、皆さんにも大いに楽しんでいっていただきたい。
そして自分は小さな人間だと悲観することなく、なんでもできるんだって、もしかしたら自分もやれるかもしれないって、そんな大いなる気持ちでチャレンジし、楽しんでいっていただきたいなって思います。

その70兆分の一の奇跡は、たくさんの愛を受けてこの世に存在すること、今一度皆さんに思い起こしていただきたいと思います。

私の拙い経験のお話ではございましたが、皆さんお待たせして、長い時間ご静聴いただきましたこと、心より感謝申し上げます。
そして今日私をここに呼んでくださった桜井さんが手紙をくださったんですね。
そして私はその手紙を読んで、桜井さんの70兆分の一の奇跡の熱い思いに私は動かされて、ここに来させていただいて、ここにいらっしゃる70兆分の一の奇跡の皆さんとの出会い・・・。
私は出会いが奇跡だと思っているんです。
また今日もこんなにたくさんの奇跡の出会いをいただけましたこと、心より感謝を申し上げます。
本当にご清聴ありがとうございました。

遺伝子スイッチ・オンの奇跡（風雲舎）
工藤房美 著

インド・ネパール料理　ロータス
〒 861-8083　熊本市北区楡木4丁目2-17
TEL 096-227-6833

中央新聞　昭和30年3月29日　第3種郵便物認可

宮崎発夢未来～感動の共感を世界中に

みやざき中央新聞

〒880-0911 宮崎県宮崎市田吉6207-3 info@miya-chu.jp　Tel(0985)53-2600 Fax(0985)53-5800

毎週月曜日(第5月曜日は除く)、月4回発行/1か月1,080円(税・送料込)

11月2日(月)
2015年(平成27年)
2623号

2面記事
高垣 忠一郎さん……心のドアを開くために～No. 2
栗城 史多さん……見えない山を登るすべての人たちへ～No. 4
南 徹さん……対話が創った日本の文化～No. 3 (終)
ルダシングワ 真美さん……第二の足で歩き出す～No. 4
野中 千尋……取材ノート「これでいいの」

社説 オピニオンエッセイ

眠っている遺伝子をオンにしてみよう

魂の編集長　水谷 謹人

「なんでこがんなるまでほたっといたんだ！」。平成18年5月1日、工藤房美さんは熊本市民病院の医師から怒鳴られた。

末期のがんだった。48歳。家には心を病んでいる夫と高校3年生を頭に3人の息子がいた。

検査に2週間かかり、明日はいよいよ手術という日、主治医が言った。「がんが広がり過ぎていて手術ができません」。あまりのショックで涙も出なかった。帰宅して、3人の息子たちに遺書を書いた。

長男には「あなたを誇りに思う。これからも堂々と自分の好きなことをやりなさい。病気になってごめんね。大好きだよ」

高2の次男には「楽しいことを見つけることが得意だから好きなことを見つけて楽しんで生きて…」

小6の三男には「大変なときは我慢しないで周りの大人の人に助けてもらいなさい。お兄ちゃんたちと3人で協力したらなんでもできるよ…」

「愛している」「あなたたちの母親になれてよかった」「あなたたちを最後まで愛し抜く」ということを精一杯伝えた。

扁平上皮がんという、内部が空洞になっている臓器の粘膜に発生するがんだった。

主治医から「ラルス」と呼ばれる治療法を告げられた。「痛くて苦しい治療です。これを3回します」と。

治療の日、看護師から、「痛み止めも麻酔も使いません。タオルを口に入れます。耐えるしかありません」と説明を受けた。その後、1時間かけて器具が取り付けられた。体が固定され1ミリも動けなくなったところで、口にタオルが入れられた。

それは、痛いとか苦しいという次元のものではなかった。1時間、手が動かせないので溢れる涙も拭えない。口が塞がれていて悲鳴も上げられない。「治療ではなく拷問だ」と思った。

その夜、「なんでがんになったんだろう」と自分を責めた。がんを告知されたときは出なかった涙が一晩中枕を濡らした。

2回目の治療の前日、三男の小学校の先生から一冊の本が届けられた。筑波大学で長年遺伝子を研究してこられた村上和雄先生の『生命の暗号』という本だった。

最初はうつろな目でページを開いていた工藤さんだったが、次第にその目が大きく開いていった。胸の鼓動が高鳴った。読み終えたのは夜中の2時だった。

「人間には約60兆個の細胞があり、その一つひとつに遺伝子があって、一つの遺伝子には30億もの情報が書き込まれている。ところが人間の遺伝子のうち実際に働いているのは全体のわずか5%しかない」というようなことが書かれていた。

「眠っている95%の遺伝子を少しでもオンにすることができれば元気になるのではないか」、そう思ったら、ワクワクしてきた。大声で「ばんざーい」と何度も叫んだ。

工藤さんは決心した。「私の命はもう長くないかもしれないけど、今まで私を支えてくれた一つひとつの細胞と遺伝子にありがとうを言ってから死のう」と。

まず目や耳、手足、心臓、胃など、健康なところに「今までありがとう」とお礼を言った。抜けていく10万本の髪の毛一本一本にも「ありがとう」を言った。闘病生活は「ありがとう」を言う生活に変わっていった。

さらに患部のがん細胞にもお礼を言いたくなった。「正常な細胞だったのに私の思考の癖や歪んだ生活を教えてくれるためにがん細胞になってしまってごめんなさい。そして、ありがとう」

詳細は、今月末に発刊される工藤房美著『遺伝子スイッチ・オンの奇跡』をお読みいただくとして、「余命1か月」と宣告されていた工藤さんはその後どうなったか？

がんの告知から10か月後、子宮と肺と肝臓にあったがんはきれいに消えてしまった。今工藤さんは熊本市内で「ロータス」というカレー専門店を経営している。

著書の中で工藤さんは「良い遺伝子をオンにするコツ」をまとめている。①どんなときも明るく前向きに考える②思い切って今までの環境を変えてみる③人との出会い、機会との遭遇を大切にする④感動する。笑う。ワクワクする⑤感謝する⑥世のため、人のためを考えて生きる。

*** MEMO ***